

での医者を経験を活かし、郡山市で鍼灸医として自立しているが未だ日本の風俗習慣、日本人の気質になじまず、苦勞の日がつづいてゐる。長女悦子も本年六月家族と共に帰国し、所沢の中国帰国孤児定着促進センターに入所し、言葉や習慣を学び、十月一日から郡山市に永住することになった。

この家族も養母も一緒であり、これからの苦難の日が続くと思われるが長男長女と、お互いの過去と今後のことなど語り合いたいと思つてゐる。

今考えると、あれ程に盡忠報国、五族協和の理想に情熱を燃やした幾百千万の人々の血と涙は、何のためであつたのか、恐らく最後の一兵までも命令のまま、戦い死ぬ覚悟であつたのが終戦により、ピタツと銃火を止め、妻子家族のもとに帰れるかと思つたら、今度は極寒地に向かつて連行され従順に強制労働に励み、幾十万人が死没し、助かつた私も無我夢中で働き通し、しかも戦後復興、祖国再建に汗を流し、現在でも年中無休で仕事に精を出し、雑事に追い回され貧乏暇なしである。

あの戦争がなかつたら私の生涯も変わつてゐた筈である。

私の戦争の「キズアト」は私が死ぬまで続くだろう。

## 七人の子供と共に

滋賀県 山村 千秋

一生忘れることの出来ない昭和二十年五月十五日、この日がこの世での主人の顔の見納めでした。これでも一人前の男となつたと表面はいたつて元氣に家を出ました主人、僅か十四歳の長男に「あとを頼む」と一言、その時長男の下には長女、次男、三男、四男、次女、そして一週間後に五男の出産日を控えている私を残しての出征、その時の主人の心中を思いますと断腸の思いで一ぱいです。

戦局の不利を案じ、生れてくる子のためにと、ほしい物資の中でいろいろと準備に追われての心細い一日一日が過ぎて行きました。予定通り、主人の留守中

に五男を出産いたしましたけれど、遂にその子の顔は勿論のこと、「安産で良かった」というハガキすら受け取ることは出来ませんでした。

親も子もお互い顔も知らないで……。生れながらに不運を背負って、いつ迄たつても、未だに不憫で仕方がありません。十二歳になったばかりの長女が出産の手伝い、そして兄、弟、妹の面倒もと、よくあの年端も行かない子があれだけの働きができたものと、今でも自分の子ながら感心いたしております。

終戦三日ほど前で疎開のため、酷暑の満州で貨物列車、それも水を積んだ貨車につめ込まれ、途中、機銃掃射をうけ、一週間あまりも引つ張りまわされました。生きた心地もないとはあのような時をいうのでしよう。

終戦と同時に、跡かたもなくなった会社、一銭の収入もなく、幼い七人の子供を抱えて、酷寒の満州での生活、思っただけでも心身の凍るような毎日でした。乳呑子を抱えている私は働くことも出来ず、僅かな持ち物を手放したり、長男が小さいながらも酷寒の中を

タバコや豆腐の行商と働いてくれました。

その頃ポツポツと応召した人達が帰って来られる話を聞いて、もしかしたら主人もと、かすかな希望を持って過ごしておりました。夜など、かすかな物音にも耳をそばだてるような始末でした。

酷寒が終ってヤレヤレと思つた途端に、国府軍と中共軍の内戦、わが家の前での市街戦、地雷の破裂と生きた心地もありませんでした。

心細い満州での生活も、昭和二十一年の七月十九日で終止符を打ちました。いよいよ日本への引揚げ、主人の出征後は淋しい、そして苦しい生活でしたが、主人と過ごした最後の土地を離れるということは、やはり感慨無量でした。

今まではたとえソ連に連行されていても陸続き、逃げて帰ることも可能なような気がしておりました。今から思いますと、ずいぶん甘い考えですが、そんな風に思っていましたのに、海をへだててしまつたら、もうどうすることも出来ませんもの。

コ口島で乗船時はもう同じ陸続きの土地ではないと

思いましたら、帰りたい日本ではありませんが、うしろ髪を引かれる思いがいたしました。汽車の乗り降り、そして乗船、下船の際に私が第一にしたことは、荷物よりも子供の数を数えることでした。

苦しい苦しい引揚げの旅も兄弟に会える楽しみでようやく博多に上陸しました時は、本当にホッといたしました。

しかし、また同時に、長い間の戦争、敗戦で疲れきった日本、そのうえ、外地からの引揚者や復員兵で充満していてせまい日本、乏しい物資の日本ではたして親子八人が食べて行かれるかしら、こんな状態だったら、満州で死んでしまったほうがよかったのではないかしらと、こんな不らちな思いさえ起こした時もありました。

帰れた以上、七人の子供達を命にかえて、どんなに少しでも一人前にしなければならぬと決心いたしました。

幸いに実家の離れに住むことができました、その上、兄嫁が九州人で太っ腹の方でしたので、肉親の兄以上

にほんとうによく面倒をみてくれました。それに力を得て、今度はふるさとでの死闘が始まりました。

幸い三男は姉の所でしばらく預かって貰いましたので、家から通学しておりましたのは四人、そして下の二人が留守番で長女が学校から帰るまでは、兄嫁に世話して貰いまして、来る日も来る日も、行商に出掛けました。末っ子はおんぶして出かけたこともありましたが。

くたくたになつて家に帰る頃は、とっぶり日も暮れて、幼い子供達は、夢路を辿っていることがたびたびでした。若い頃には、教壇に立ったことのある私が、今は行商人、人の運命などというものはほんとうにわからないもので、しかしそれを恥ずかしいと思いませんでした。

子供を大きくするためには、どんな苦勞でもすると覚悟を決めていましたから。

来る日も来る日も、大根葉の刻みこまれたお粥をこしらえておくのも長女の仕事でした。栄養がいろいろといわれる昨今ですが、よくあれで親子八人の健康が

保たれたものとふしぎに思われます。

苦しい事にも、行商にも慣れるにしたがつて、顔なじみができて、品物も売れるようになり、時には昔の教え子達の暖かい気持に触れて涙ぐむこともたびたびでした。

こうした中から、最後の一人が帰る迄と、自分にも子供にも言い聞かせて、引揚促進運動に全身全力をあげて精進いたしました。主人はとうとう消息不明、生死不明のまま公報処理されました。そのことは悲しいことですが、長い運動の中で、自分で納得が出来ました。

私の心残りには、一番苦勞を共にしてくれました長男が数年前に妻子を残してガンのため早逝したことです。私もはや八十歳をこえましたが、往時の辛苦を思いおこしながら、一日一日を大切に送っております。

## 満州チチハル地域からの記録

岩手県 小野寺 正 夫

昭和二十年八月八日、ソ連は日本に宣戦布告、八月九日チチハル上空にソ連機が二度にわたり飛来、チチハルの日本軍飛行場に爆弾を投下爆破炎上。十日チチハル鉄道局前にソ連機二機飛来爆弾投下五十トン、満州里では午前零時すぎに突然対岸のマチェフスカヤから集中砲撃をうけ、国境警備隊員二十人、参事官金尾猛ほか約百人が戦死し、婦女約五十人は自決した。十一日第一報、満州里駅長より電話で報告、ソ連軍満州里に進駐と。その後ハイラル―牙克石―博克図―札蘭屯―昂昂溪を経て八月十七日、チチハルに進駐。

八月二十一日、ソ連軍により日本人鉄道局工場建設事務所、各現場機関、約五千九十七人が各職場を追放された。反満抗日分子が釈放され「治安維持会」成立。ソ連軍人の物取り・暴行盛んに行われる。日本人将校、